法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

江間さんを偲ぶ

MASUJIMA, Ko / マスジマ, コウ / 増島, 宏

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社會勞働研究 / Society and labour
(巻 / Volume)
39
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
3
(終了ページ / End Page)
4
(発行年 / Year)
1993-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00018660

江間さんを偲ぶ

増島　宏

江間さんの研究室は私の隣であった。ゼミや講義のある日には、いつも朝早くから来て、入念な準備をしているようであった。顔を合わせると、例のやさしい笑顔で挨拶したり、せきたてるような口調で語りかけてきたりした。「先生、テニスをやってるんですって。今度僕とやりましょう。」といったのを覚えている。しかし、この約束も永遠に果たせぬものになってしまった。

江間さんはやや小肥りな、温和な容貌をしていたが、厳しい一面をもっていたように思う。法政大学が、多摩キャンパスへの移転を条件として、学科や大学院の充実をしてきた関係で、その実施を迫られていた。また、これをきっかけとして、教学施設の充実を図り、念願の改革をしようという機運が高まっていた。経済学部、社会学部が移転を決意した。この時、教養課程をどうするかが一つの問題であった。複雑な学内状況の中で、江間さんは悩んだようである。特に、体育は多摩に新しい施設を集中したので、何人かの教員が経・社の学部に移ることは不可避であった。江間さんは大学の置かれた位置や、保健・体育教育の将来を考え、先輩の青木先生とともに社会学部に移る道を選んだ。この決断はかなり勇気の要るものであり、江間さんの持っている内面の厳しさを示していた。

１９９２年の夏休み、亡くなる少し前のことであった。江間さんから一通の丁寧な手紙を受け取った。それには、

一年間の研究休暇を元気に送っていること、さらに、近代スポーツの発祥の地であるイギリスで研究を深めたいので、私に紹介の労を取って欲しいことがるる述べてあった、この返事を出す間もなく、江間さんは先立たれてしまった。

ラグビーの優勝、駅伝のシード校入りなど、多摩で鍛えられた若者たちが育っているとき、隣の研究室の空席は、なんとも寂しいかぎりである。